堀合先生に学ぶ(9)

一人ひとりの育ち

立川　多恵子

♡　朝の出会い

私が園に着いたのは九時少し前だったが、堀合先生はもうテラスで登園してくる子どもたちを待っていた。次々にくるすみれ組の子どもたち（年少組）は、どの子もまっしぐらに先生の待つ靴箱のところへ飛んで行く。先生に出会う嬉しさを全身に表現している子どももいる。一学期には見られなかった光景である。

保育室ではママゴトをしている子、ミニカーを並べている子、絵を描いている子、部屋の中を歩き回っている子などいろいろである。

裏庭に出たら、**さとし**と**しょうた**がバケツに砂を入れて遊んでいた。傍らで**しょうじ**が川を作っている。**さとし**は先生の姿が見えると、早速「先生、バケツほしいよ」と言う。先生は「バケツね」と言い

ながらあちこち探していたが、保育室に戻って、数個の赤い木の椀を持って来た。そして「バケツはなかったけど、これではどうかしら？」とたずねた。**さとし**はその椀を黙って先生の手から受け取ったが、そのまま自分の横において、手元のバケツに砂を詰め込む。おそらく先生の出してくれた木の椀は、**さとし**のやりたいと思うことを実現するためには使えない道具だったのだろう。**さとし**のあそびは「めあて」がしっかりしている。

♡　偶然が生み出す遊び

園生活というのは面白いもので、さっき先生が出してくれた木の椀は、**さとし**の傍らで遊んでいた**しょうじ**を刺激した。**しょうじ**はその椀に興味を持つと、早速手にとって砂を入れて型抜きを始める。

しょうじの作ったプリン状のものが三つ並んだ時、**さとし**は「それが欲しい」とねだる。ケーキの飾りにしたいというのだ。**しょうじ**ははっきり「だめ」と言って断った。**さとし**はねだるのを諦めて、**しょうた**と二人で自分たちで型抜きを始める。**しょうじ**のはっきりした自己表示や、断られた**しょうた**、**さとし**が自分たちの思いを自分たちの力で実現しようという姿勢はすみれ組の子どもの育ちを象徴している。

さとしも**しょうた**も型抜きには馴れていないようだ。**さとし**は力まかせにお椀に砂を押し込むので、逆さにしてもなかなか抜けない。**しょうた**の方は逆に軽く入れるので、型抜きしようとすると、崩れてプリン状にならない。二人は何度もやり直して、やっと二つ作る。それを**さとし**がケーキの上に載せる。デコレーションケーキの出来上がりである。

型抜き遊びはどこの園でも入園当初から見られる遊びである。型抜きは「プリンあそび」と言われることもある。子どものやっているのを見て、大人のつけた遊び名である。子どもたちには何か違った意

◀ プリンを作りはじめた

味があるのかもしれない。しかし一学期のすみれ組ではこの型抜き遊びに出会うことが少なかった。先生が教えないからである。堀合先生は子どもが環境と出会って生み出す遊びをとても大切にしている。

♡ 遊びを継続する

しょうじの型抜き遊びに興味を持ったさとしとしょうたが揃って参加してきたので、砂場の縁には四十個余りのプリン状のものが並んだ。そこへ先生がいらして、

「あら！ きれいに並んだわね、全部並んだら一番美味しそうなのをいただこうかしら」と言う。先生も食べ物を想定しての発言である。先生はしばらくしゃがんで、子どもたちの型抜き遊びを見ていたが、やがて保育室に戻って行った。

その先生の後を追ってしょうたも保育室に戻る。砂遊びは出入りが自由である。

▶「あら！　きれいに並んだわね」

しょうじとさとしは相変わらず型抜きに余念がない。二人はお互い影響し合っているのだが会話を交わすことはない。さとしの型抜きの技術は長足の進歩であり、もう、抜けなかったり、崩れてしまったりすることはない。しょうじの方は崩れてしまってやり直すこともある。

そこへりょうが加わり、しょうじ、さとし、りょうの三人はせっせと自分の作ったものを砂場の縁に並べる。大きな砂場の周りにプリン状のものがずらっと並ぶ。

もう少しで出来上がりという時に、しょうじは突然大きな声で「りょうちゃん、今日遊びにきていいよ」と言う。りょうはしょうじの方を見て頷く。その言葉を聞いてさとしが「ぼくは？」と聞く。しょうじはすぐに「さとくんもいいよ」と応える。その声を聞きつけて砂場にやって来たかずやも「ぼくは？」と聞く。しょうじはかずやの申し出に対しても「いいよ」と機嫌よく応える。

型抜きあそびの持続が、彼に充足感を感じさせ、どの子も受け入れるといった広い気持ちを起こさせたのだろう。もう少しで出来上がるというところで、りょうもさとしも保育室に引き上げてしまった。しかししょうじだけが黙々と型抜きを続ける。手つきも大分達者になった。彼はもう失敗することは殆どない。最後の一個を作った時、しょうじの頑張りに感心して、私は「とうとうやったね」と声をかけてしまった。型抜き遊びは外側からでも子どもの努力の見える活動である。

その時タイミングよく保育室から出てきたさとしが、「できた！　できた！」と大声で叫んだ。そして大急ぎで保育室に戻っていった。先生に報告するつもりだろう。完成したしょうじより、さとしの方が喜んでいる。

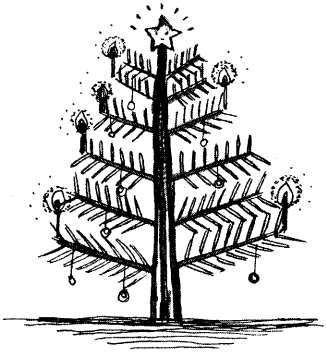
しょうじはさとしを追うようにして保育室に戻っていった。そこで私もそのしょうじの後を追って保育室に戻ったが、そこには先生の姿は見えなかった。

さとしは先生を探してホールに行く。しょうじはテーブルの前の椅子に掛けて、ウルトラマンのお面を描き始めた。さとしが先生を見つけて報告したのか、保育室に戻ってきた先生は、他の子の世話をすると早速、砂場に行った。そして「ほんと！　並んだわね」と一言いった。その言葉を聞いてさとしは得意そうだった。私はしょうじがその場にい合わせたら、どんな表情をするだろうかと考えてみた。しかし、しょうじはすでにお面作りという次の活動にとりかかっていた。型抜き遊びで得た充足感が、安定した気持ちで次の活動に取りかからせたにちがいない。

今日のしょうじのあそびの持続性はたしかに目を見張るものがあった。しょうじにはこの時期それが必要だったのだろう。すみれ組には子どもにとって必要な活動の出来る時間と空間が保障されている。

しょうじのことはすでに本誌の四月号で紹介して

いるので、覚えている方もいるかもしれないが、入園当初であったが、彼は降園時間になってママゴトをやり出して先生を戸惑わせたことがある。その時先生は「遊び始めるのが遅かったからね」とつぶやいて、ママゴトを止めさせないで待ってやった。しょうじはそのため納得するまで遊んで、自分からお帰りの列に入って行った。こうした配慮はその後の子どもの園生活にとって大きな影響をもたらすと考える。



♡　子どもが変わる

私がしょうじに初めて会ったのは、入園二日目のことだった。その日、しょうじは年長組の子どもから砂をかけられるという災難に会った。しょうじにはその年の三月に十文字幼稚園を卒園した兄がいた。その友達が朝から何度もしょうじを呼びにきていたが応じなかったので、しょうじが園庭に出たのを幸いに砂をかけられてしまったのだ。目の前でしょうじが砂だらけになったので、私はあわてて止めに入ったのを覚えている。

先生のお話ではしょうじはその翌朝から登園を渋

るようになったという。五月の始め私が久し振りですみれ組を訪ねた時も、先生はしょうじを抱くようにして保育室に連れてきた。それにもかかわらず、彼はすぐ逃げだしたので、先生はあわてて追いかけて、再び抱いて戻ってきた。それが六月になって、嫌がらずに登園するようになったので、「しょうじちゃんは嫌がらずに登園するようになりましたね」と先生にお話ししたことがあった。

先生は「入園当初は門が開いていたので、飛び出されて事故にでもあったら大変と考えて、必死で連れ戻していましたが、どうもいい気持ちがしないのです。この気持ちはしょうじさんも同じだろうということに気づいて、もうしょうじさんを引き止めるのはやめようと思ったのです。そうしたら不思議ですね、その日からしょうじさん、登園しても自分で保育室にくるようになったのです。そこで私もそれからはしょうじさんの気持ちにまかせようと思ったんです。子どもを変えようと思ったら保育者の方が変わる必要があるんですね」と語ってくれた。

先生は「最近やっとしょうじさんが私に心を開いてくれるようになりました」と話していた。それは型抜きあそびが続いた後のことである。子どもが心を開くようになるのは、安定できるようになった時である。あの日の型抜き遊びの充足感はしょうじの気持ちの開放に一役かったものと考える。こうした日々の生活の小さな経験を通して子どもは育っていく。

（十文字学園女子短期大学）